Marine Turtler

マリンタートラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌
第22号

表紙の絵
鈴木 楓様

今号の表紙の絵は鈴木　楓様のイラストです。黒島研究所でタイマイをはじめて見て、くちばしや甲らの形の美しさに惹かれたそうです。骨格標本作りが趣味の鈴木様にとっても、ウミガメの骨は脊椎動物の中でも珍しい形で、陸ガメと違って水中に適応した素晴らしい造形美のようです。この絵は黒島研究所で研修中に読んだ「Sea　Turtles」の写真を参考にして描いていただきました。今度はシュノーケリングをして水中で本物を見たいとの事です。ステキなイラストとエピソード、ありがとうございました。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

●サイズ：B5
●色：自由。（仕上がりはモノクロになります。）
●期限：〆切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、
　　お早めにお願いします。
●応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
●送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
　　日本ウミガメ協議会　マリンタートラー編集部
　　※メールの場合は info@umigame.org　まで
　　件名に「マリンタートラー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリン・タートラー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。
つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートラーと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 22 ―― 3P
「敵がいっぱい」　岡本 慶
室戸回顧録 ―― 5P
「～徳島調査、そして元海岸から室戸調査基地へ～」　亀崎 直樹
事務局からのお知らせ　松宮 賢佑 ―― 7P
新人紹介　～海と魚にあこがれて～　岡崎 鮎美 ―― 8P
各地からの報告
東京海洋大学うみがめ研究会の活動紹介　笠井 崇弘 ―― 9P
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪～ジョージ・バラーズさんを訪ねて～
若月 元樹 ―― 11P
種子島「うみがめまつり」　久米 満晴 ―― 13P
うみがめ勉強会の紹介　亀田 和成 ―― 14P
学芸員実習　黒島研究所での学芸員実習の報告　黒田 菜月 ―― 15P
寄付 & Seaturtle goods shop ―― 16P
STSmembers募集中! &STSmembers更新手続きについて ―― 17P
編集後記

「敵がいっぱい」

国立研究開発法人水産研究・教育機構　国際水産資源研究所　岡本　慶

「カメにも外敵なんているんですか？あんな硬そうな甲羅なのに!?」
「そうなんです。頑丈そうな甲羅をしているんですが、実はリクガメより甲羅の骨は薄くて、これは素早く泳いで逃げるためにそうなったんですが、それゆえ噛み砕けてしまう敵がいるんです。」

つい先日、とある居酒屋で友人とカメ談義に花を咲かせていたら、たまたま隣になったお兄さんとお姉さんに声をかけられ、一緒に飲むことになった。上の会話はその時の一節である。ふと過去の本連載を振り返ってみると、ウミガメの敵については述べられていないことがわかったので、2回にわたって取り上げることにする。

ウミガメが海に入ってある程度大きく育ってからの最大の敵は間違いなくイタチザメだろう。八重山諸島で行われた調査では胃内容物（お腹の中に入っていたもの）が入っていた344個体のうち31個体（約9%）からウミガメが出てきたという報告があるほか、小笠原諸島でアカウミガメが襲われていたという報告もある。英名tiger sharkの由来である縞模様を持つこのサメは、ホオジロザメに次いで人にとっても危険とされる獰猛な種類である。大きさは通常、全長3～4mほどで、大きいものでは7.5mという記録すらある。このイタチザメ、ひと言でいうならまさに悪食。世界各地からウミガメ捕食例の報告があるほどウミガメを特に好むようであるが、魚はもとより、サメやエイにアシカやアザラシ、ひいてはクジラまで餌とすることも知られている。しかも、生きていようが死んでいようが関係なく襲うようで、ハワイでは生きたザトウクジラを25頭ほどのイタチザメが襲っていたという報告もある。こんな悪食のイタチザメがなぜ特にウミガメを好むかについてはわかっていないが、一つ考えられることがある。イタチザメは、サンゴ礁周辺やラグーンといった比較的浅い海域に多く生息しながらも、外洋域にも姿を現す。それらの海域はウミガメたちにとっても重要な生息域となっている。大きな体を維持するためには、それなりに大きなエサが必要となることが想像できる。そんな彼らにとって、体が大きいため効率よく胃袋を満たせるうえに、比較的襲いやすいウミガメは格好のエサとなっている可能性があるのである。

またウミガメの敵として、シャチも知られている。イタチザメよりもさらに大きく、生態系の頂点でもあるシャチもまたウミガメにとって怖い敵であろう。それもそのはず、南米ガラパゴス諸島周辺で撮影された映像では、海面付近に浮かんでいたクロウミガメが突然下からシャチに突き上げられて宙を舞っている。きっと何が起こったかわからないままに食べられてしまったに違いない。同様のシーンが北太平洋のアカウミガメにおいても確認されている。生息する海域によって主に食べるエサが異なるシャチがどれぐらいの頻度でウミガメを利用しているかはわからないが、“海のギャング”として知られるシャチも敵であることは間違いないだろう。

そのほかアメリカ合衆国のフロリダ周辺ではイタヤラ（ゴリアテグルーパー）というハタの仲間の大型魚によっても捕食された記録がある。イタヤラは硬骨魚でありながら大型のものは全長3mほどにも達するため、当然それに比例して口も大きくなる。サメやシャチのようにウミガメの骨を噛み砕くほど強い歯を持たない彼らは甲長30cm程度の幼体なら丸呑みしてしまうようである。

さて、これまでに述べてきたような敵に襲われると、おそらく死亡してしまうことが多いだろう。しかし、襲われたとしても死ぬことはないものの、ウミガメの個体にダメージを与える敵もいる。例えばダルマザメである。英名ではCookie-cutter sharkと呼ばれるこのサメに襲われた生物には、まるでクッキーの型抜

きをしたようなきれいな丸い跡が残る（図1）。このダルマザメもウミガメだけでなく、クジラやオットセイ、マグロやカジキなどの大型硬骨魚、サメやエイといろいろな生物の肉を餌としているようで、水揚げされたマグロが本種によって穴だらけにされていることも少なくないようである。

また、ウミガメが敵から襲われるのは海中ばかりではない。なんと産卵に訪れたメスの成体を砂浜で襲うものもいるのだ。最も有名なのはネコ科の肉食動物であるジャガーだろう。特に中米コスタリカでは太平洋側ではクロウミガメ、ヒメウミガメにタイマイが、大西洋側ではアオウミガメとオサガメが襲われている。しかも大西洋側のトルチュゲロでは年に200個体近く襲われた年もある。主に襲われているのはアオウミガメであるが、ここで産卵するアオウミガメの数は尋常ではない。ピークの時期には5kmほどの浜に一晩800頭もやってくるのだ。この数からすれば、ジャガーに襲われたアオウミガメはほんのわずかで、個体群に強く影響を与えるような数ではなさそうだが、今後の動向が気になるところである。なお、陸上ではイリエワニに襲われた記録もあるが、またの機会にしよう。

さて、今号ではとりあえずある程度育ったウミガメの敵について紹介したが、ふと考えてみただけでも次々と敵の名前が浮かんできた。もしわれわれヒトが、常に敵に襲われる危険と隣り合わせのような状況だったら、敵に襲われる話をしながら酒なんて飲んではいられないことだろう。

図1. ダルマザメに襲われたと考えられる痕跡（石原孝氏撮影）

～徳島調査、そして元海岸から室戸調査基地へ～

岡山理科大学（元ウミガメ協議会会長）　亀崎 直樹

私が四国と本格的にかかわるようになったのは、徳島県の要請を受けてウミガメ調査の手伝いに伺うようになった 1997 年のことと記憶している。徳島県では日和佐のアカウミガメの産卵回数の減少や自然海浜の消失に危機感をおぼえ、徳島全域の産卵状況をボランティアの力で明らかにし、それを保全することを目的に、1999 年よりウミガメ保護ボランティア支援事業を開始した。私は 1999 年から 2013 年まで年に２度ほど徳島に出向き、徳島の皆さんのウミガメの報告を伺い、酒を飲み、それをまとめるような役割を務めさせていただいた。徳島のアカウミガメの産卵回数は日和佐や蒲生田で見られるように確かに減少していた。考えられる原因の一つとして、「高知の人に食べられるんよ」という人が何人もいた。事実なら気になる。

実はそれまでに私は一度だけ高知県を訪れたことがある。1995 年の家族旅行である。高知の印象は、正直悪かった。闘犬をみて、こりゃあ子供に見せるものではないとその場を離れると、細長い木の箱が置かれ、中には尾長鶏が囲われていた。自由にすると動いて尾長鶏の尾が切れるらしい。動物虐待の県、高知という印象をもった。これならばアカウミガメも食べるだろうと考えたのだった。

徳島に通い始めるのとほぼ同時期、1999 年に高知から仕事がきた。国交省が室戸市元で国道の工事をするが、アカウミガメの産卵への影響を最小限にしたいという話であった。私は協力をすることにした。特に問題になるのは、元川にかかる元大橋の建設と完成後の仕様であった。私は外灯の設置方法など様々な提言を行い、国交省は要請の多くを聞き入れてくれた。そして、実際に現場の工事が始まった 2001 年のことだった。私は工事の進捗状況を見に行ったが、現地の元地区の人たちの顔が気になった。何だか私に怒っているように感じたのである。このような仕事を請け負うと、コンサルタント会社の担当者が私と対応してくれるのだが、私と地元の人の接触を避けようとする雰囲気があった。私は地元の人と話すことなく、役所の人に高知空港に送って行かれた。しかし、どうしても元の人達の顔が気になった。搭乗口を越えたところで、私は思い切って引き換えし、飛行機をキャンセルし、レンタカーを借りて元に戻った。最初に訪ねたのはガソリンスタンドで、そこの店主の光本博輔さんに出会えたことがラッキーだった。私に対する怒りも最もで、私はウミガメの産卵期である６から７月の海岸での工事を規制するように伝えていたが、地元の皆さんにとっては台風の時期に工事を行うようになってしまい、被害が出るのではないかと心配されていたのだ。私は悪者だった。光本さんと国道やカメについての話していると、光本さんは方々に電話をかけ始め、夕刻には公民館で宴会をすることになっていた。そして「カメ食べるんですか？」という私の質問に「食べちゅう。食べちゅう。カメは特に冬がうまいんね。」と答えられた。私は大いに疑問と興味を持った。まず、当時は大きなアカウミガメが日本の沿岸にいるのは産卵期の夏だけと考えられていた。太平洋で育ったアカウミガメが成熟する前に日本近海を泳いでいることがわからなかったのである。私は冬にアカウミガメが定置網で獲れることをきき、詳細を調べたいと思った。翌日、光本さんが紹介してくれたのは、室戸岬の東側にあるホテルニュー室戸の吉本峯一さんと当時高岡漁協の組合長をしていた細川豊喜さんだった。ホテルニュー室戸の池ではアオウミガメとアカウミガメが飼育されており、それが捕獲されたのが高岡の定置網だったのだ。

当時は今よりも漁師町は閉鎖的で、一見自然保護団体のようにみなされている我々に対して、漁師さん達の眼は厳しく、冷たかった。互いに理解するまでに数年かかった。その時、活躍したのが日本ウミガメ協議会でボランティアをしていた宮形佳孝氏と神戸市立須磨海浜水族園の大鹿達弥氏であった。思ったよりカメは頻繁に獲れ、連絡があると片道５時間ほどかかる室戸に出向きカメの計測を行い、放流した。高速や橋の通行料が高く、NPO には本当に痛かった。何度も顔をだし、酒を酌み交わすと、私たちの理解者も増えてきた。山下傑氏、山下昌治氏などである。とにかくアカウミガメはたくさん捕れていた。室戸で調査が始まり、室戸基地を設立し、私の大学院生であった岩本太志氏、石原孝氏、優谷真理氏などを派遣した。また、多くの職員、ボランティアが交替で定置網に混獲されるカメを調べるようになっ

た。その結果、これまでのアカウミガメに対する概念が大きく変わることになる。すなわち、日本近海には季節を問わずアカウミガメが回遊していること、その多くは未成熟の個体であることであった。そして、食べられるカメも大部分が冬の未成熟個体であり、さらに食べられる割合も５％以下であり、徳島の産卵の減少には直接関係ないことがわかったのである。

話を元大橋に戻そう。2003 年、元大橋は完成した。ウミガメの産卵場としての砂浜は守れたと信じていた。ところが、元海岸からは大きく砂が流出し、カメが産卵できるような状態ではなくなった。原因は室津港の拡張工事であることは明白だった。元海岸の東にある室津港が避難港として拡張される工事が行われ、それに伴い漂砂が変化し、元海岸から砂が消えたのだ。必死に元大橋のことを考えたのに、別の開発工事によって産卵地の環境が破壊されたのは忍びない。元大橋の工事を行うのも、室津港を拡張するのも同じ国交省なので、私は国道事務所の担当者に掛け合ったのだが、これまた予想通りの縦割り行政の典型。双方は全く連絡を取り合ったことが無いと言う。元はこれで古くから維持していた環境を失ってしまう。かつての砂浜は元の人達の息吹で充ちていた。岩戸神社の祭りのときは神輿が浜を練り歩き、子供たちはこの浜で水泳の訓練を行った。カメが産卵すると、いつしかその卵を元小学校で保護し、ふ化させるようになっていた。海の幸に恵まれ、温暖な気候は豊かな農作物を供給した。山の木も売れた。たまにアカウミガメの鍋をして酒を飲んだ。そんなある田舎の平和な生活は、1950 年代にはじまる護岸工事、そして、それに続く元大橋の付け替え工事、室津港の拡張工事によって崩れてしまった。

ある日、私もアカウミガメの鍋を食べるチャンスがあった。寒い冬に高岡漁港の風があたらないところで火を焚き、カメの肉の入った鍋を漁師さん達はこさえてくれた。とにかく臭い。しかし、匂いはすぐに慣れる。すると、脂ののったアカウミガメの味が旨く思えるようになる。鍬の上にのせて焼いた肉も旨い。これが司牡丹によくあう。ところがこの鍋は最近ほとんど行われていないらしい。色々な理由はあるだろうが、漁師さん達が私達の活動に付き合ってくれる過程で、カメに想いを寄せるようになったからかもしれない。私は、室戸で最もアカウミガメを解体するのに関わっていた仲買が、我々が放流しようとしていたアカウミガメの腹甲に赤いチョークで書いた文字が忘れられない。「元気でね」。

人間は良かれと思ってやったことが裏目にでることが多い。元の集落を大波から守ろうとしてできた護岸も、命は守っても集落の元気をなくしてしまった。我々がウミガメをとおして室戸で行ったことの是非も、ちゃんと議論する必要があるかもしれない。

1957年頃の室戸市元地区の海岸線、撮影者はわからない。

事務局からのお知らせ

事務局長 松宮賢佑

平素よりウミガメ協議会の運営にご理解、ご協力を賜り誠にありがとうございます。当会より会員の皆様に2点 お知らせがございます。

1.会員制度の変更について

当会の会員区分には学生会員、賛助会員（STSmembers）、正会員の3つがありました。このうち学生会員は廃止と致します。

賛助会員は会誌であるマリンタートラー、うみがめ速報などの会員特典を得られます。正会員も同じ特典を受けられますが、当会の運営にも参加して頂くこととなります。具体的には、年に一回の総会に出席し、運営にたいしてご意見を頂き、議決権を有します。あわせて、各種イベントの手伝い、資金および会員の獲得にもご協力頂くことになります。現在、皆様は賛助会員の扱いとなっております。賛助会員の皆様のなかで正会員をご希望の方は事務局までご連絡ください。手続きに必要な書類を送付いたします。引き続き賛助会員をご希望の方は、特に手続きはございません。

賛助会員の会費は、個人会員（年会費3,000円）と団体会員（年会費10,000円）です。正会員は個人のみで、会費は賛助と同様となります。

2.第38回国際ウミガメシンポジウムおよび第28回日本ウミガメ会議の同時開催

2018年2月18～23日まで神戸国際会議場を会場に、表記の2会議を同時開催いたします。このため、日本ウミガメ会議は毎年11月に開催しておりましたが、平成29年度は2017年11月ではなく、2018年2月となります。

国際ウミガメシンポジウムは、日本ウミガメ会議の国際版のようなものです。近年の開催地は、ニューオーリンズ（米国）、ダラマン（トルコ）、リマ（ペルー）で、2017年は4月15～20日にラスベガスで実施されます。4日間にわたる本会議と、それに先立つ地域会合やワークショップでは、世界で行われている研究や活動成果などが紹介され、保全の方向性について熱い議論が行われます。イベントも盛りだくさんで、オークションの売り上げはなんと200万円！全て学生の旅費支援に充てられます。

国際学会とは名ばかりで堅苦しさはありません。通訳も用意します。海外のウミガメ関係者と交流するまたとない機会ですので、是非、多くの方にご参加頂ければと思います。今後、実行委員会と組織委員会（事務局：神戸市立須磨海浜水族園）で準備を進め、当会のホームページ、ウミガメ速報などを通じてご案内いたします。また、運営費を賄うための協賛広告、通訳ボランティアも募集していきますので、あわせてご協力宜しくお願いします。

～海と魚にあこがれて～

岡崎 鮎美

はじめまして、岡崎鮎美と申します。私は、娘の名前に魚を付けてしまうほどの魚好きの父に連れられ、毎週のように水族館へ足を運んでいました。出身地である岐阜県には海が無いので、いつも海を見るだけでわくわくし、そこにいる魚たちに惹かれて水族館で働きたい、と思うようになりました。飼育員を目指して大阪の専門学校へ入学し、水生生物について勉強しました。ですが、就職活動が思うようにいかず水族館に落ち続ける日々をおくりました。それでも「魚の匂いをかぎたい!」と自暴自棄になっていた時、講師できていたウミガメ協議会の松沢会長に、高知県室戸で漁師とともに調査していることを教わりました

室戸へ行くために、「先ずは黒島で修行して来い」と言われました。そして最南端の黒島研究所へ。ここでは他のボランティアさんたちと共同生活をしながら、展示用の生物を捕獲したり、ウミガメの産卵を観察するために砂浜を歩いたり、島人と朝まで呑み明かしたりしました。黒島では飼育の技術だけでなく、地域の方々と交流を持つことの大切さを知りました。研修を終えて室戸へ。室戸は漁師さんばかりと聞いていたので、馴染めるか不安でした。でも、室戸に到着した次の日に漁師さんと先輩の田中優衣さんが私の歓迎会を開いてくれました。初めは何を言っているか分からなかった土佐弁に何となく「可愛いですね」と言うと、みんなが競うように土佐弁で話し始めた事がもう懐かしいです。この日の事はきっと一生忘れる事はないと思います。次の日からは優衣さんに教えられながら、定置網に混獲されるウミガメにタグ付けや測定を行いました。ウミガメがこんなに身近な生き物に感じたのは初めてでした。水揚げの時には魚の選別を手伝わせて頂く機会もあり、漁師という仕事のかっこよさや大変さを改めて感じました。初めて見る魚や美味しいお刺身、毎日がわくわくの連続でした。

今は更に修行をつむために紀宝町ウミガメ公園に来ています。紀宝町では、ウミガメ以外にも地元の漁師さんや養殖場から頂いた魚も展示しています。最近は、魚の種類や数も増えて水槽がにぎやかになってきました。また、飼育用の海水を汲みに行った時には、漁師さんと鍋を食べたり魚の捌き方を教えてもらったり。このままだと、いつか私も漁師に漁獲されるかもしれません。名前のとおりに。

東京海洋大学うみがめ研究会の活動紹介

東京海洋大学うみがめ研究会　笠井崇弘

東京海洋大学うみがめ研究会 (以下、かめ研) は 1997 年に設立されたウミガメの研究と教育を目的としたサークルです。様々な活動を通してウミガメに対する日頃から思いを馳せ、熱い情熱を燃やしています。

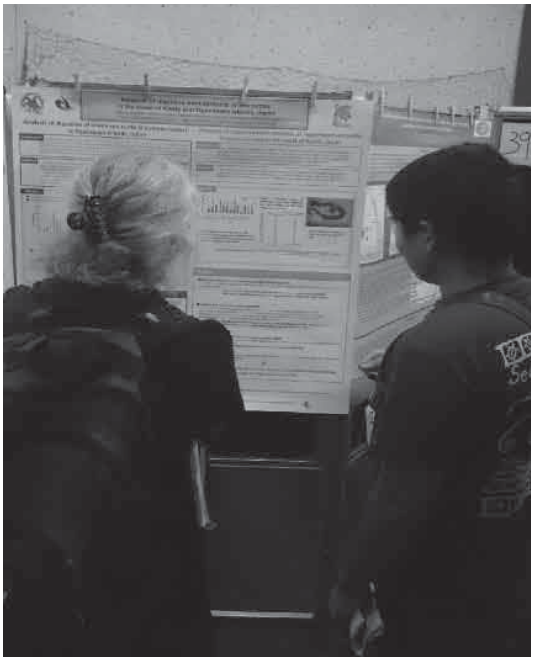
先日、天皇陛下が皇居内のタヌキのフンを 5 年間にわたって採集し調査した論文を発表され、広く報道に取り上げられました。この報道によって野生生物の摂餌生態を研究していく中での地道な消化管内容物のサンプリング調査の重要性が伝えられましたが、それはウミガメ類においても例外ではありません。かめ研の研究活動は、認定 NPO 法人エバーラスティング・ネイチャーの協力のもと、小笠原諸島父島で行われているウミガメ漁で水揚げされたアオウミガメおよび関東沿岸のアカウミガメやアオウミガメの死亡漂着個体を対象としています。これらのウミガメの消化管から得られた内容物を解析することで、未解明の点が多いウミガメ類の摂餌生態に関する研究を行っています。調査を進めると、ウミガメ類の食性は幅広い上に、個体差や年度によって異なることがわかってきました。ある年は海藻を、次の年にはホヤを食べていたりします。このため、ウミガメの食性は数年、数十年という長期的な視点に立って調べる必要があり、短期間では結果がでないことがわかってきました。なお、現在までの研究成果は、【うみがめニュースレター 104 号】に掲載されています。是非ご覧ください。

研究活動で得られたデータや結果は、日本ウミガメ会議や International Sea Turtle Symposium においてポスター発表をしています。自ら説明し、多くの方々にご意見をいただくことは、活動の原動力になります。また、International Sea Turtle Symposium に学生サークルとして毎年参加しているのは、日本ではかめ研だけ、世界においても非常に珍しいです。世界中の海を回遊するウミガメを知るには、日本だけでなく、世界で「どのような状況にあるのか」、「どのような研究がなされているのか」を学ぶことが大切だと思います。そして、国際性を養っていくことは、自分達の将来にとって大きな課題と考えています。実際に、世界中のウミガメ研究者と交流し、最新の研究発表を聞く機会を得られたことは、自分達にとって素晴らしい経験でした。海外の研究者の方からは、カリフォルニアでも小笠原と同様の食性が見られるなど、かめ研の活動に直結するような意見を頂けました。しかしやはり、国際シンポジウムに参加する上で最も問題となったのは語学力です。国際シンポジウムでは当然英語が用いられており、英語に不自由な自分達は聞きたいことを質問し、その答えを聞き取ることさえ満足にできず悔しい思いをしました。

教育活動では、一般の方々に向けて大学周辺の図書館や大学祭である海鷹祭、江東区民祭などでウミガメに関する説明をしています。普段、馴染みのないウミガメという生き物を知っていただき、多くの方々に考える機会を持って頂ければと考えています。対外的な活動だけでなく、かめ研の内部でも年間の報告会であるカメゼミや勉強会を開催しています。カメゼミでは、ウミガメを研究されている大学院生や研究者に講演して頂き、自分達だけでは気付くことが出来ない点を学んでいます。

長期休暇を利用して、エバーラスティング・ネイチャーの小笠原海洋センターや日本ウミガメ協議会の黒島研究所で研修を行い、フィールドでの実践経験を積み重ねています。どちらの実習先も最大の仕

事は暴力的な日差しのもと体を動かし、穴を掘り、汗を流すことでした。小笠原では毎日カメのふ化率調査のために、黒島では施設全体の整備をするために汗を流しました。私が入部する時に思い描いていた【ウミガメの研究】とはかけ離れていましたが、このような地道な努力によって地域に根付いた研究施設が維持され、数十年にわたるデータが積み重ねられることを知りました。フィールドで活動を続けていくことは決して簡単なことではなく、今後、自分達がウミガメに限らず海洋生物を扱っていく上で、現場の大切さを痛感しました。最後に、私たちの活動がウミガメの保全に少しでも役立ち、なによりも自らの成長の一助になればと思います。また、今後もウミガメに対する熱い情熱をなくすことなく、精力的に活動を続けていきたいと考えています。



もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪～ジョージ・バラーズさんを訪ねて～

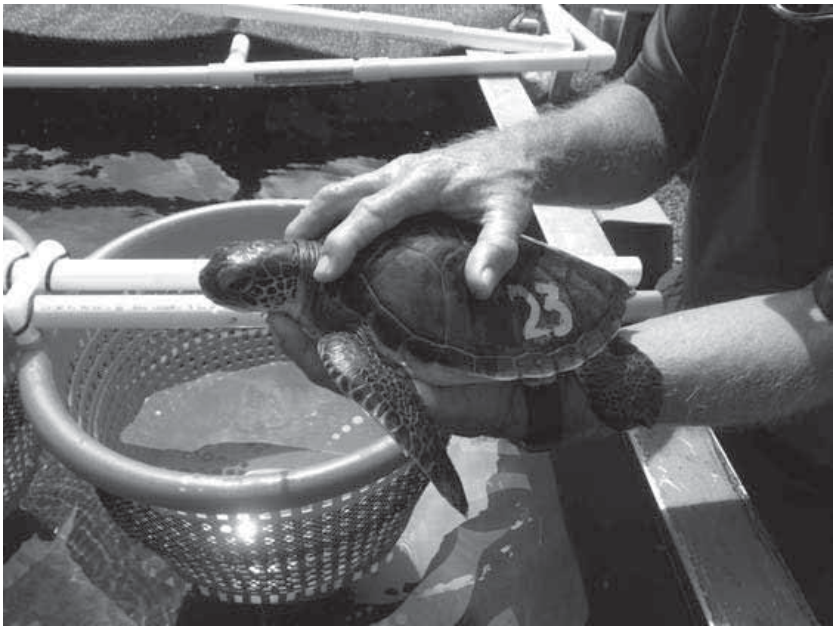
黒島研究所　若月 元樹

ハワイ・オワフ島のジョージさんを訪ねたのは在沖縄米国領事館から文化担当領事が黒島研究所に来たことがきっかけでした。ちょうど滞在中だった某水族館のウミガメ担当者達と一緒に、領事とウミガメに丁寧に対応したつもりでしたが・・。領事は我々のウミガメの取り扱いにご不満だったらしく、黒島を去った後「ウミガメの取り扱いを海外で学んでこい」というお達しがあり、渡航費用のご支援を頂いたのでした。

ハワイといえばホヌ（ハワイ語でカメ）。街のそこら中にホヌの写真やイラストなどがあふれています。ジョージさんはいちいち反応しては喜び、写真を撮ります。しまいには何の変哲もない岩がウミガメに似ていると言い出し喜びます。彼にとってハワイは楽しい場所であるのに違いありません。観光客が集まる有名なウミガメのバスキングビーチで上陸がなかったため、ジョージさんの友達の家のプライベートビーチに案内して頂き、ウミガメの日向ぼっこを見ることができました。まるで岩に擬態しているかの光景には驚きました。もしかすると、我々が気づいていないだけで、もっといろんな所でバスキングしているかもしれません。ハワイ島にも日帰りで行って参りました。ジョージさんは高校生たちと一緒に浅瀬に寄ってくるアオウミガメを次々と捕まえ、計測やタグ装着などの調査していました。インナータグも手慣れた様子で入れていました。70 代とは思えぬ体力に驚かされました。

目的だったウミガメの取り扱いですが、ジョージさんや彼から紹介して頂いた方々が言うには、「人間の赤ちゃんと一緒」とのことでした。ウミガメを一時的に入れる容器、計測台などにはすべて緩衝材が敷かれていました。子ガメを飼育するリゾートホテルではゴム製の網で子ガメをすくい、子ガメが泳ぐ大きなプールには自動で餌を投入するタイマーも設置されていました。今回、ジョージさんにハワイでの研修をコーディネートして頂いたおかげで、領事の指摘が理解できた気がします。日本のウミガメとそれらに関わる我々はもう少し待遇を改善する必要があるかも知れません。

カメの正しい持ち方 1



カメの正しい持ち方 2

高校生と調査するジョージさん

バスキング

若月と日本のウミガメの伝承について話すジョージさん

種子島「うみがめまつり」

NPO 法人タートルクルー　久米 満晴

今年で第 10 回を迎えた種子島「うみがめまつり」をご存じでしょうか？言わずと知れたアカウミガメ産卵地種子島で、島の子供達にウミガメの事、海の自然の事を、楽しみながら正しく伝えようと始め、はや 10 年。メキシコでのうみがめまつりに参加したことがきっかけでした。最近は 500 人以上集まるお祭りとして定着し、いつやるの？と聞かれることも多くなりました。

内容は少しずつ変化してきました。始めは子供のサーフィン大会も一緒にやっていました。途中からは地引網を恒例化し、偶然ウミガメが入ることもしばしば。近くに住む魚を知ると共に、こんなにウミガメが身近なんだと、子供達も実感するようになりました。協議会から毎年講師を招き勉強会をしたり、ウミガメの絵コンテストから、海からのメッセンジャー「カメジョウ」というキャラクターも生まれました。

10 年というのはいろいろな事があったわけで、3*11 震災の後は福島県の子供を招待したり、大人に震災の講演会をしてもらったり。台風の当たり年には３回延期になった年もありました。日本で「うみがめ」と名のつくお祭りは種子島だけだよ、そうオサガメのような奄美の水野さんに言われ、開催が辛い年もあったけど、なんとか開催してこれました。恒例のウミガメの一生を再現した「ウミガメ生涯レース」は毎回盛り上がるし、決めるテーマは、太平洋をやっと渡ったところで、まだ、帰り道があります。うみがめまつりは、まだまだ続きますし、メキシコうみがめまつりに参戦する夢もあります。ドリームズ カメトゥルー！

うみがめ勉強会の紹介

黒島研究所　亀田 和成

ウミガメ勉強会は、東日本大震災で低迷した黒島の観光を呼び戻すため、2011 年の夏から始まりました。この勉強会はウミガメの生態解明を目的とした標識放流調査と黒島の観光を結びつけたものです。今では、年末年始、春休み、5 月の大型連休、夏休みの毎日開催するようになっています。内容としては、黒島研究所の剥製をつかったウミガメの見分け方、陸ガメとの違いなどを説明します。その後、実際にウミガメに身体測定をして放流します。このウミガメには標識がついていて、一頭ずつ見分けられるようになっています。この勉強会の特典としては、放流したウミガメが次に何処かで見つかった時に参加者にお知らせする登録ハガキや参加者の手元にも思い出が残るように測定記録用手ぬぐいがあります。つまり、勉強会に参加した日から標識放流調査はスタートし、勉強会に参加した思い出がいつまでも残るようになっています。他にもさまざまな面白い特典や体験ができるこの勉強会に、皆さまも是非ご参加ください。また、この企画を手伝ってみたい、将来は動物にかかわる仕事に就きたいという学生らの研修もお待ちしております。

黒島研究所での学芸員実習の報告

三重大学４年　黒田 菜月

私は水の中で泳ごうともがくと、途端に水の底に沈んでしまいます。そのため、水の中で自由に泳げる魚たちにあこがれを持っていました。出身が海のない奈良県ということもあり、家の中で飼っていた金魚が最も馴染みのある魚でした。眺めるうちにどんどん金魚が好きになり、金魚すくいに目覚め、全国大会で戦えるレベルまでになりました。しかし、優勝できません。そこで「魚について学んだら、もっと金魚をすくえるのではないか」という気持ちから大学に進学しました。１年生の時に、先輩から「色々面白いよ!」と聞いて、黒島研究所に行くことを決めました。この「色々」という言葉に、本当に色々なことが含まれているとは・・。待っていたのは穴掘り!植林!ウミガメ!でした。減っていくのは体力・気力、増えていくのは筋力という日々でした。その中でも、息抜きにいったシュノーケリングでは、大いにはしゃぎました。自分が泳げないことを忘れて、つかまった浮き輪を引っ張ってもらいながら見た海の綺麗さに感動しました。

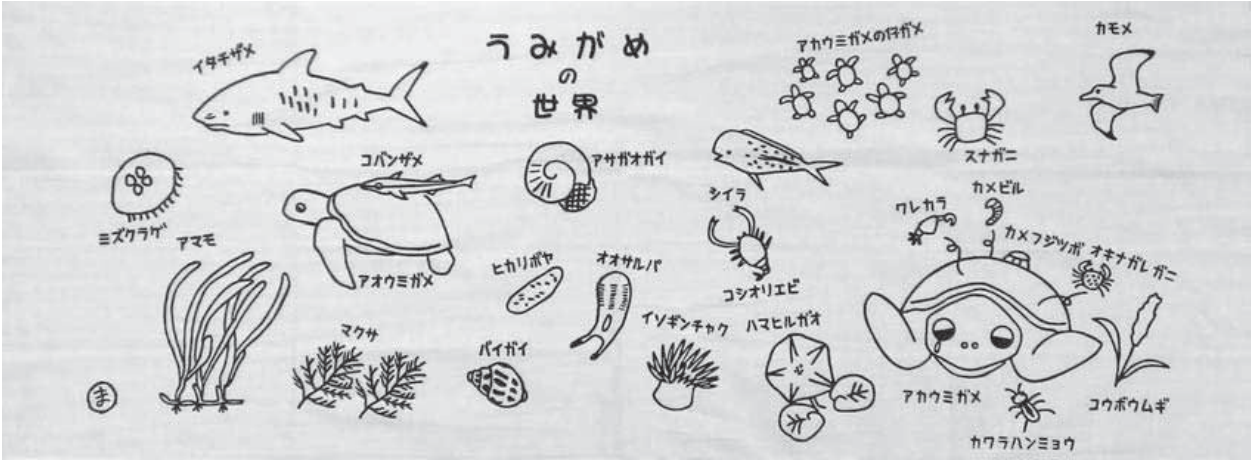
いつしか、筋肉痛の記憶は薄れ、楽しかった思い出だけが残っていました。そして、社会の荒波に揉まれる前に、学芸員実習で黒島に行く決意をしました。実習では、受付、展示解説、飼育生物の世話をしました。飼育生物の餌やりは、家で飼っている金魚は近寄ると水面で口をパクパクさせて「餌くれ」と訴えかけてくるのに、研究所の魚たちは媚びてきませんでした。それでも魚の泳いでる姿を見るだけで顔がほころんでしまう私にとって幸せの時間でした。サメの水槽にヨコエビが発生していて「こいつら魚の傷をかじって直りを遅くする」と聞き、対策としてエビを食べるベラをいれましたが、ぱくっとサメに食べられました。弱肉強食の厳しさを知りました。解説は重点的に指導され、お客様の反応によって話す内容などを臨機応変に変えることを学びました。お客様から研究所以外のことも聞かれます。そのような質問にも答えられるように、島内の観光名所を巡りました。今までは、観光客気分で眺めていたものを、メモをとるようになったら、違うものに見えてきました。このように毎日が至福と驚きの２週間は、あっという間に過ぎ、私にとって最高の思い出になりました。

ご寄付を頂いた方々 2016年3月1日～2016年9月30日

岩本　貴美子、一般財団法人H2Oサンタ、江口英作、王丸秀一、尾田賢治、菊池昌伸、ギフコ株式会社、串本海中公園センター、久保竜二、公益財団法人パブリックリソース財団、国民宿舎紀州路みなべ、後藤清、近藤康男、サイトウミツル、サポートセンター翔、四国コカコーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、シャディ株式会社、George　Balazs、白崎英文、添田誠二、添田麗子、玉岡昇治、照本善造、坂東武治、ビーチアン、福原　富士美、前田一樹、松平和子、ミナト　ヒサカズ、南知多ビーチランド、森下俊二、ヤフー株式会社、山田輝一、有限会社ジュネ、ライオン株式会社（五十音順、敬称略）

この他にも、黒島研究所、室戸基地、みなべ調査基地に募金&差し入れをして頂いた皆さま、本当にありがとうございました。

Seaturtle goods shop　人気! うみがめの世界 手拭い☆



当会スタッフがデザインしたオリジナル手ぬぐいできました。手ぬぐいにはアカウミガメを中心とした海の生き物たちが描かれています。流れ出る汗をぬぐうのもよし、ちょっとしたウミガメの説明に使うもよし、夏のお供にはおすすめの一品です。

■864円　■色　白地×紺　■解説付き

インターネットでお買い物

うみがめグッズがインターネットショップからご購入いただけます。オリジナルグッズのご購入はもちろん、会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは各種クレジット、ネットバンキング、楽天銀行等からお選びいただけます。

アクセスはこちら！

http://seaturtle.shop-pro.jp

◆ STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートしてくださるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金：なし
年会費：個人会員3,000円、団体会員10,000円
特別会員100,000円
会員特典：オリジナル会員証＆グッズ、機関誌

seaturtle goods shopからもご入会いただけます。詳細は下記サイトへアクセスしてください。
http://seaturtle.shop-pro.jp

◆ STSmembers更新手続きについて

会員更新の書類は会員期限終了月に送付させていただきます。会員の皆様のご支援で、ウミガメやそれを取り巻く環境を保全してゆくことができます。更新月を迎えられる会員の皆様は、是非とも更新して頂ければ幸いです。今後とも当会をよろしくお願い致します。
なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。
※学生会員制度2015年度をもって終了しました。

編集後記

編集担当の亀田と申します。本誌は19号まではウミガメ協議会職員が中心となって書いていましたが、20号からは日本各地で活躍しているウミガメ関係者にも書いて頂くようにしました。1ページ目にも書いてあるようにMarine Turtlerは、ウミガメに関わる様々な人たちを示します。ですから、一般会員の方々からも、ウミガメとの出会いや思い出、地域に伝わる昔話など、広く原稿を集めたいと思います。本誌に登場したいタートラーは、私までご連絡ください。皆さまは、私が依頼した場合は断らないで下さい、お願いします。それでは、2017年が全国のタートラーと海亀達にとって素晴らしい年になることを祈っております。

黒島研究所：亀田 和成

マリンタートラー（日本ウミガメ協議会機関誌）

発行日　2016年12月31日
発行　　日本ウミガメ協議会

〒573-0163　大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
電話：072-864-0335　Fax：072-864-0535
URL　http://www.umigame.org　E-mail　info@umigame.org